

書簡文研究資料としての明治期往来物

三八

小 椋 秀 樹

書簡文は、古代から現代まで長い歴史を持つ文章であり、また、数多くの文章のなかでも、もっとも日常的な文章として文字による言語生活において重要な位置を占めてきた。それゆえ、書簡文を語り、文章などの面から体系的に考察していくことは、今まで、あまり研究の進められてこなかった書きことばの歴史を解きあかすうえで、重要な課題ということができる。

ところで、書簡文の歴史のなかでも明治期は、近世期から書簡文の規範となっていた候文体書簡文にかわって、言文一致体書簡文が成立するなど、ひじょうに大きな変化が見られるという点で注目される時代である。このことから、これまでの明治期の書簡文に関する研究は、おもに言文一致体書簡文を対象として進められてきた¹⁾。しかし、たしかに言文一致体書簡文の成立は、書簡文の歴史のなかで大きなできごとではあるが、その時期は、明治三〇年頃と遅い。そのため、言文一致体書簡文は、明治期において大きな勢力を持つにはいたらなかった。明治期においてもっとも多く用いられていたのは、近世以来、書簡文の規範としての位置

を占めていた候文体書簡文なのである。したがって、候文体書簡文の研究を進めていかなければ、明治期における書簡文の全体像を明らかにすることはできない。

ところが、候文体書簡文のような近世的なものをひきついで言語事象は、明治期においても近世と同様のスタイルのまま、変化していきないと考えられたためか、あまり研究が進められていない²⁾。しかし、明治期の候文体書簡文は、近世のそれとまったく同じというわけではない。明治期のことばの変化や、ひとびとの書簡文に対する意識（近代の書簡文としてどういうものがふさわしいのかという意識）の影響を受け、明治期なりの特色を持つ候文体書簡文となっているのである。したがって、語り、文章などの面から、明治期の候文体書簡文が、どのように用いられ、また、どのように変化したのかということを研究していくことが必要である。

このような研究を進めるにあたり、資料としてまず注目されるのは、往来物（書簡文の書きかたを往復の例文で示した模範文例

集。平安時代末期成立の『明衡往来』以降、多種多様なものがあらわれ、なかには、社会的常識を学ぶための教科書としての性格を持つものもあった²⁾である。往来物は、ルビにより語形の確定がしやすいなど、語い研究資料として有用なものである。また、量的に豊富であるという点も通時的研究に適している。とくに、この量的な面に関しては、明治期にも、江戸時代と同様、ひじょうに多くの往来物が出版されており、明治期の候文体書簡文を研究するのに、じゅうぶんな量があると思われる。

したがって、明治期の候文体書簡文を研究するにあたっては、これら明治期往来物の資料的な性格が分かっていることが望まれるのである。しかし、その資料的な性格について論じたものは、ほとんどなく、今後の研究を待つという状況にある³⁾。とはいえ、候文体書簡文を国語学的に研究していかうとするならばからは、明治期往来物の全体像が明らかになるのを待つて研究を進めるといふわけにはいかない。したがって、明治期の往来物の語い、文字表記などを調査し、言語の面から資料の性格を見通していくことが必要となるのである。

このようなたちばから、本稿では、明治期に刊行された候文体書簡文の往来物を取りあげ、各往来物における頭語、結語の使用実態を調査し、その結果から、それらの往来物が明治期の候文体書簡文の研究資料として、どのような性格を持っているのかについて考えてみたい⁴⁾。

一、目的・資料・方法

一・一 目的

中世から近世にかけて書簡作法が確立していくのにもない、候文体書簡文の表現は固定化し、さまざまな定型表現が見られるようになった。その代表的なものとして、まず頭語、結語があげられる。近世期の書簡文では『消息往来』に、

一筆啓上仕、致啓達、令啓、以手紙申入……(331p)

恐惶謹言、頓首不備。不宣、敬白、不具、以上……(335p)

とあるように、頭語、結語で用いられる語がほぼ一定しており、とくに頭語では「一筆啓上仕候」、結語では「恐惶謹言」が多く用いられていた。

ところが、この近世に広く使われていた「一筆啓上仕候」「恐惶謹言」は、明治期、とくに後期になると次第に用いられなくなり、現在もつとも一般的に用いられている「拝啓」「敬具」などが一般化してくる。この一般化の様相については、橋(一九七七)に言及があり、とくに頭語「拝啓」の語誌については、実際の書簡、辞書、往来物などを資料として調査がなされている⁵⁾。

さきにも述べたように、候文体書簡文は、近世期のスタイルそのままに変化がないと考えられたためか、研究対象としてあまりとりあげられることがなかった。しかし、たとえば、頭語、結語といった定型表現に注目してみると、右のような変化が見られるのであり、明治期には、新しい候文体書簡文が形づくられている

ことがわかる。

したがって、これら定型表現を候文体書簡文のキーワードとしてとりあげ、明治期往来物における使用実態を調査していくことで、明治期における候文体書簡文のありようを明らかにすることができる。また、その結果から、各往来物の資料的な性格について見通しをえることも可能である。つまり、近世期往来物に見られるような定型表現を多用する明治期往来物は、近世以来の規範をかなり受けついでいるものと考えられる。その反対に、そのような定型表現を用いないものは、近世期とは異なる新しい候文体書簡文を収めたもので、明治期なりの新しい意識のもとに編さんされたものと考えられるのである。そして、明治期の候文体書簡

【表一】

分類	書名(内題)	編著者	刊年	装丁	書体	所蔵
A	万体用文章	不明	明3	和装	草書	前
A	新体書翰便蒙	萩原乙彦	明4	和装	草書	小
A	普通用文章	荻田長三	明5	和装	草書	前
A	繙文文章自在	易亭主人	明5	和装	草書	前
A	漢語文章大全	大月隣四郎	明5	和装	草書	小
A	漢語用文	條野孝茂	明5	和装	草書	前
A	四季文章	長橋間右衛門	明7	和装	草書	小
A	日用文章	卷菱潭	明8	和装	草書	小
A	富貴用文章	伴源平	明9	和装	草書	前
A	懸筆作文自在	志貴瑞芳	明9	和装	草書	小

文を研究していくにあたっては、この新しい意識のもとに編さんされた往来物を重点的に調査していけばよいということになる。

そこで、本稿では、候文体書簡文の定型表現の代表として頭語、結語をとりあげ、明治期の往来物でどのような語が用いられているのかを調査し、それをもとに、各往来物の性格を考えることとする。そして、明治期の候文体書簡文を研究するためには、どのような往来物を調べればよいのかということについて見通しをえたいと考えている。

一・二 資料

一・二・一 調査資料

今回調査した資料は、次にあげる五〇点である。

A	B	A	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
天下 明治用文	新撰注解用文	新撰用文章大全	初作文独稽古	聖作文章早学	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)	明治作文三千題(下卷)
藤谷暢吾	佐藤 勉	奥田清十郎	篠田秋野	松下照義	近藤延之助	伊良子晴州	福井 淳	山岡鉄作	青木東園	近藤元晋	前田孝典	味岡弥輔	岡本権丞	益永晃雲	岸野武司ほか	徳山 純	宇喜田小十郎	平山政流	榑崎隆存
明 29	明 29	明 28	明 28	明 27	明 27	明 24	明 23	明 23	明 19	明 18	明 16	明 15	明 14	明 14	明 13	明 12	明 12	明 11	明 11
和装	洋装	和装	和装	和装	洋装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装	和装
草書	行書	草書	楷書	行書	楷書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書	草書
前	前	前	前	前	小	小	前	前	小	小	中	前	小	小	小	小	前	橋	小

書簡文研究資料としての明治期往来物

C	C	C	C	B	B	A	B	B	A	B	B	B	B	B
書翰文大全	手紙講習録	新書翰大成	新書翰文作法	尋常卒業後実用作文	日本用文章	書翰文習字用(上巻)	新青年書翰文	有益新用文	新撰手紙文例	高等作文独習	新普通書簡文	新朝野普通用文	新郵信用文	新実益新用文
野田千太郎	野田千太郎	斯華会出版部	内海弘蔵	泉豊春ほか	大畑 裕	藤原桜唯	大町桂月	服部躬治	鈴木與八	磯野秋渚	野村銀次郎	横川胤治	的場銚之助	伊沢孝夫
明 45	明 45	明 44	明 44	明 42	明 41	明 41	明 39	明 39	明 37	明 36	明 35	明 35	明 32	明 32
洋装	洋装	洋装	洋装	洋装	洋装	和装	洋装	洋装	和装	和装	和装	和装	和装	和装
楷书	楷书	楷书	楷书	楷书	楷书	草書	楷书	行書	草書	行書	草書	行書	行書	行書
大	大	大	大	大	小	中	大	小	前	前	小	前	小	前

※

前…前田富祺蔵
 橋…橋本行洋蔵
 小…小椋秀樹蔵
 大…大阪府立中央図
 書館蔵
 中…大阪府立中之島
 図書館蔵

一・二・二 往来物の分類

調査資料を一覧した表1には、往来物の書名のうえにA、B、Cの三種類の記号を付している。これは、今回調査した資料を形態から分類し、記号化したものである。ここでは、この分類について述べておく。

本稿は、言語の面から明治期往来物の性格について見通しをえ

るということを目的としている。しかし、往来物の性格を考える際には、言語のみではなく、その形態にも注目する必要がある。というのは、往来物の形態は、それぞれの往来物が用いることばとけつして無縁ではないからである。したがって、往来物を形態から分類、整理しておけば、各往来物の性格を検討するための参考とすることができる。

明治期往來物には、装丁が和装のもの、洋装のもの、書体が連綿のもの、楷書のものなどがある。ここでは、装丁と書体というふたつの面から、今回調査した往來物五〇点を三種類に分類した。

A類 和装本 草書体

B類 洋装本 楷書体、行書体（活字で連綿体ではない）

C類 洋装本 楷書体（活字）

まず、A類のものは、近世に刊行されていた往來物と同様の形態を持つものである。板本仕立てで書体も連綿の草書体となっている。本の大きさは、前期には小型のものが多くようである。しかし、明治一〇年代後半や明治二〇年代になると、大型のものも見られるようになる。また、本文に用いられた語の類語集や証書文例、漢語辞書などを頭書に持つものが多く見られる。

B類のものは、基本的にはA類の流れをくみつつ、洋装本、活字体などへと形態が変化したものと見ることができよう。また、本文の類語などを頭書に持つものが多く見られることもA類と共通している。このことからA類の流れをくむものという見方ができる。ただ、明治四〇年代刊行のものには、言文一致体の例文も採録しているものがあり、この点はA類と異なっている。なお、今回調査した往來物には、装丁は和装本であるが、本文は活字体となっているものがある。たとえば、『実益新用文』などがそれにあたる。これらの往來物は、従来の往來物の形をふまえて、あえて和装本にしたものである。わたしは、これらの資料については、書体が活字体となっていることを重視して、B類に分類する

のがよいと考えており、ここでもそのように分類している。

C類のものは、ページ数の多い大部なものである。明治三〇年代後半から多く出版されている。内容的にも、書簡文作法の理論的な事項について、多くのページを割くものがある。また、言文一致体書簡文の例文を採録しているものも見られる。

本稿では、右のように往來物の形態のうち、とくに装丁、書体に注目して三種類に分類した。以下、この分類をふまえたうえで、頭語、結語の使用状況をもっとも重要な視点として、各往來物の性格を考えていくこととする。

なお、右の分類は、今回調査した往來物のみを対象として、往來物の性格を考える際の参考にすることを目的として行ったものである。したがって、さらに多くの資料を調査したばあい、あるいは、書誌的事項についてさらに細かく見ていったばあい、右の分類を修正する必要があるかと思う。そのような点については、今後の課題としたい。

一・三 方法

今回の調査の目的は、一・一で述べたように、書簡文の定型表現である頭語、結語を調査することで、各往來物の性格を検討し、明治期の候文体書簡文を研究する際に調査すべき資料の見通しをつけるということにある。この明治期の候文体書簡文を研究するにあたり調査すべき資料というのは、言いかえれば、明治期なりのより新しい意識で編さんされた資料ということになる。

それでは、多くの頭語、結語のなからどのような語を往來物

の性格を調べる手がかりとすればよいのであろうか。

すでに述べたように、明治期には「一筆啓上仕候」「恐惶謹言」など近世期に多用された頭語、結語が次第に用いられなくなり、「拝啓」「敬具」へと頭語、結語が交替していった。つまり、「拝啓」「敬具」が候文体書簡文の新しい定型表現となつていったのであり、明治期における候文体書簡文の規範としての位置を占めるようになっていったのである。

したがって、今回のように明治期の新しい意識で編さんされた往來物を見つけたすという調査では、まず、「拝啓」「敬具」をキーワードとして、往來物の性格を検討していけばよいのである。また、「拝啓」「敬具」以外でも「謹啓」「拝復」「謹言」などは、今回の調査を進めていくうえでキーワードとなろう。なぜなら、これら三語も現代比較的よく用いられる頭語、結語であり、「拝啓」「敬具」を多用する往來物と同様、「謹啓」「拝復」「謹言」を多く用いる往來物は、現代につながるより新しい意識で編さんされたものと考えることができるからである。

以上述べたことから、今回の調査では、次の①②のような手がかりを設定し、考察を加えることとする。

- ① 現代もつとも一般的な「拝啓」「敬具」を用いている。
- ② 「拝啓」「敬具」のほか、「謹啓」「拝復」「謹言」などの現代、比較的よく用いられている頭語、結語を用いている。

二、調査結果

本節では、今回調査した往來物における頭語、結語の使用実態について見ていくこととする。ただし、紙数の関係で、すべての頭語、結語について見ていくことはできないので、往來物の性格を見通す手がかりとして設定した「拝啓」「謹啓」「拝復」「敬具」「謹言」を中心に見ていくこととする。以下、挙例にあたっては、漢字はおおむね現行の字体にあらため、ルビは問題としている語に付されたもの以外は省略した。

二・一 頭語

ここでは、「拝啓」「謹啓」「拝復」の各往來物における使用実態について見ていくこととする。これらの頭語の各往來物における使用数を表2にまとめた。この表では、「拝啓」「拝復」については、結語として用いられているものがあるので、頭語と結語とに分けて用例数を示した。また、「寸箋拝啓」など、ほかの語と複合したのも別せず、「拝啓」などにまとめて使用数を示した。また、各資料の量的な違い、このばあい、各往來物のおさめている例文の数が問題となると思われる。そこで、例文一〇あたりの各語の用例数を表4に示した。なお、表4では「拝啓」「拝復」については、頭語の使用数のみを示した。

二・一・一 「拝啓」

今回の調査における「拝啓」のもつとも古い用例は、『漢語文章大全』の、

寸緒すんしゆ拝啓はいけい 陳者近日東台之單樓開遍二付（上・21才）

沢養拝啓、星霜之推移るハ蒸氣車之鉄道を走るよりも疾く

(上・56才)

寸箋拝啓、陳者先般御門人某を以頑児御入門之儀相願候処

(下・12才)

という三例である。しかし、これらは「寸箋」「尺素」「寸楮」を冠した形で用いられたものであり、現代のように「拝啓」のみで用いられた例ではない。

今回の調査における「拝啓」のみで用いられたもつとも古い例は『四季文章』の、

拝啓、秋氣清寒に御座候処(26ノ7ウ)

である。これ以外にも、明治一〇年代の資料には『文證大全』『中等作文大成』に各二例見られる。

ところで、明治初期の資料を中心に「拝啓」が結語として用いられた例が見られる。それらを次にあげる。

若納涼泛舟之貴慮も候ハ、陪遊可仕候

〔作文自在〕上・31ウ)

余者貴顔之上御礼申上候

〔作文自在〕下・33才)

このほかにも、明治一〇年代の資料では『文證大全』『新選公私用文』『帝国用文章大成』『大日本文章大成』に各二例、『農家作用法用文』に一例見られる。橘(一九七七)によると、江戸時代の書簡作法書には、「拝啓」を結語や下付けの用語としてあげるものがあり、実際の書状にも「拝啓」を下付けとして用いた例がみられるということである。明治初期の往来物に見られる結語「拝

啓」は、江戸時代の書簡作法書などに見られる結語、下付けの「拝啓」と関連があるかと思われる。

明治一〇年代の資料には、現代と同様の「拝啓」の例があるものの、その数は少なく、「寸箋」などの上接語をとまなう例、「拝啓仕候」という例、および結語に用いた例のほうが多い。したがって、この時期の資料は、近世的な性格の強い資料と推定される。

明治二〇年代以降では、すべての往来物で「拝啓」が用いられている。二〇年代前半では『帝国新用文大成』『明治作文三千題』が、それぞれ一五例、一九例と「拝啓」を多用している。次に、そのうちのいくつかをあげる。

拝啓然者昨夜御新婚無滞致為相整候由

〔帝国新用文大成〕7才)

拝啓陳者毎々御愛顧を蒙難有奉謝候

〔帝国新用文大成〕62才)

拝啓拙者事此程来阪仕(明治作文三千題)下・3才)

拝啓拙邸内へ今回新掘致候井水少々鑿気を含み居候

〔明治作文三千題〕下・48才)

この二点以外にも、二〇年代では『初学作文独稽古』、三〇年代では『帝国新体作文』『実益新用文』『高等作文独習』、四〇年代では『書翰文習字用』『尋常卒業後実用作文』『男子手紙講習録』が「拝啓」を多用している。

二・一・二 「謹啓」「拝復」

まず、「謹啓」は『帝国用文章大成』に、

「謹啓」予て懸念罷在候吳服商法略用意も整候間（下・1才）とあるが、用例が多くなつていくのは、明治三〇年代の資料からである。

ところで、「謹啓」は、古往來に、

謹啓 右除目何日乎（『明衡往來』中本・106頁）

と見られるが、近世の往來物には例を見いだすことができない。⁹⁰しかし、今回の調査では、右のように『帝國用文章大成』に見え、明治三〇年代からは、ほとんどの往來物がこの語を用いている。したがつて、「謹啓」は、明治期になつて復活した語であると思われる。明治期には、「拝啓」のような新しい語が広まつていく一方で、「謹啓」のような古い語が再生され、一般化していったと考えられる。⁹¹

「拝復」は、結語として用いられた例が、

乍失敬不待再命午前御門外までひきつれ可申候 拝復^{はやく}

（『普通用文章』13ウ）

防寒之一助にも相成候ハ、幸甚不過之候 拝復^{はやく}

（『新選公私用文』上・7才）

など、全部で一五九例見られた。一方、現代と同様に頭語として用いられた例も、

拝復愚息事今般入学致候儀（『作文独稽古』33頁）

拝復明日は凱旋諸軍の觀兵式有之候由にて

（『新撰注解用文』21頁）

など見られるが、全部で八一例と結語の例よりも少ない。

「拝啓」は、明治二〇年代以降、結語として用いられることはなくなるが、「拝復」は、明治後期にも依然として結語の例が多く、頭語、結語両用の語として用いられていたと考えられる。⁹²なお、「拝復」のこのような変遷については、今まで指摘されていなかったことであり、今後、実際の書簡や辞書類の記述なども参照しながら語史を明らかにしていきたいと考えている。

二・二 結語

ここでは、「敬具」「謹言」について、各往來物における使用態を見ていくこととする。これらの結語の各往來物における使用数を表2にまとめた。なお、「草々敬具」「恐惶謹言」など、ほかの語と複合した形で用いられているものも「敬具」「謹言」などにまとめて使用数を示している。また、さきに見た頭語と同様に、各資料における例文一〇あたりの用例数を表4に示した。

二・二・一 「敬具」

今回の調査における、もっとも古い「敬具」の用例は『帝國新用文大成』の、

御承諾被下候へば直ちに御送付願上候 敬具^{げいき}（78才）

御拝納被下候様只管奉希望候 敬具^{げいき}（104才）

など五例である。これ以降、「敬具」を用いない往來物もいくつかあるが、全体としては、「敬具」を用いる往來物が多い。

ところで、先述の「拝啓」との関連でいうと、現代一般的に見られる拝啓―敬具という対応で用いられている例が注目されよう。そのような用例は、

拝啓本日は主上御降誕之佳節：(中略)；同伴被下余興を助

玉はん事を企望仕候 敬具(『帝国新用文大成』24才)

拝啓予て御取掛かり相成候御建築御落成にて：(中略)；御
受納被下候へば本懐に御座候 敬具(『作文独稽古』38べ)

などをはじめとして、合計二九例見られた。しかし、全体から見ると、かなり少なく、明治期には拝啓—敬具という対応関係は一般化していなかったということがわかる。なお、二九例のうち八例は『尋常卒業後実用作文』での例となっている。したがって、今回調査した資料のなかで『尋常卒業後実用作文』は、かなり新しい形をとるものかと思われる。

二・二・二 「謹言」

「謹言」は、近世にも結語として用いられていたが、明治期往来物でもひきつづき結語として用いられている。たとえば、

以愚札如斯御座候猶期永日之時候 恐惶謹言まうくわうきんげん

(『万体用文章』2才)

銘酒壹樽祝賀として呈上仕候余は拝眉方可申陳候 謹言きんげん

(『帝国新用文大成』20ウ)

猶春陽永日の頃を待ち万々 早々謹言

(『高等作文独習』8べ)

など、表2に示したように、多くの往来物で用いられている。

ところで、「謹言」は、近世において「恐惶謹言」などのようにはかの語と結合して用いられることが多かった。そこで、明治期の各往來物において「謹言」がどのような語と結合して用いら

れるかを調べ、表3にまとめた。

表3を見ると、近世よく用いられた「恐惶謹言」は『万体用文章』で一六例用いられているものの、これ以降の往来物では、ほとんど用いられていないことがわかる。明治期往来物では、自後不相変御愛顧御來車之程伏而奉希候 謹言きんげん

御叱納被下候はゞ本懐に存候 謹言(『開化普通用文章』97ウ)

のように「謹言」のみで用いられることが多く、表3に示したように合計一一三例見られるのである。近世以来用いられてきた「謹言」であるが、その用いられかたには、明治期なりの特色があることがわかる。

ところで、ここで注意しておきたいのは、表3からわかるように、「上接+謹言」「謹言+下接」が明治四〇年頃に多いということである。とくに『尋常卒業後実用作文』では、ほかの往来物と比べてそのような例が多くなっている。次に、そのうちのいくつかをあげる。

余緒拝芝にと申残し候 謹言肅復きんげんしゆくへく(32べ)

先は不取敢以書狀御見舞申上候 謹言頓首きんげんとんしゅ(78べ)

先は不取敢御報知まで如斯に御座候 謹言再拜きんげんさいはい(112べ)

なお、紙数の関係で今回の考察ではとりあげられなかったが、『尋常卒業後実用作文』では「頓首」についても「謹言」と同様、

先は不取敢御見舞迄如斯御座候 頓首敬白とんしゅけいぱく(99べ)

先は貴酬迄如斯に御座候 頓首再拜とんしゅさいはい(71べ)

など、近世以前の往来物に見られるような結語が用いられている。また、同時代の『書翰文作法』『男子手紙講習録』でも、

御笑留下されたく、先は御挨拶まで 頓首再拜

『書翰文作法』129頁

何卒乍御面倒右御一報奉願上候 頓首々々

『男子手紙講習録』68頁

とあるように、「頓首再拜」「頓首頓首」などが用いられている。このような近世以前の往来物に見られるような結語を用いるのは、この時期の往来物のひとつの特色といえよう。

以上、「拝啓」をはじめ、五語の頭語、結語について簡単に明治期往来物における使用の実態を見てきた。限られた語についての考察ではあるが、いずれも明治期の候文体書簡文の特徴を示す語であり、これらをもとに明治期の各往来物の性格についてある程度の見通しをえることができると思われる。なお、「拝啓」については、橘（一九七七）で述べられたことを、往来物の大量調査で再確認したことになる。また、「拝復」については、今まで指摘されていなかった語史を一端ではあるが、示すことができた。この「拝復」の語史については、今後さらに詳しく調査したい。

三、各往来物の性格

本節では、前節での考察をふまえて、各往来物の性格について

おおまかな見通しを述べておくこととする。以下、一・二・二で行ったA、B、Cの各分類ごとに見ていく。

A類のものは、近世以来の往来物の形態をとっているものであるが、頭語、結語から見ても「拝啓」を結語に使うものがあるなど、近世的な性格を受けついでいるように思われる。とくに、明治一〇年代の資料にはそのような傾向が強い。

しかし、二〇年代からは、A類のなかにも、新しい意識で編さんされていると考えられる資料が見られる。たとえば、『帝国新用文大成』『明治作文三千題』がそれにあたる。この二点は、明治二〇年代前半の資料のなかでは、とくに注目して調べていく必要のある資料といえよう。また、明治四〇年代の大町桂月『書翰文習字用』は、「拝啓」の使用数がA類のなかではもっとも多いという点で注目される。大町桂月は、その著書『書翰文作法』（明39）のなかで、「小生が考にては、普通、用を弁ずる手紙は、前に、拝啓か肅啓かを用ゐて、後に、頓首ぐらゐでも用ゐれば、それで十分と存候。」（58頁）と述べている。『書翰文習字用』が「拝啓」を多用することには、著者である大町桂月のこのような頭語、結語に対する意識が反映していると考えられる。

なお、明治三年刊の『万体用文章』は、結語「恐惶謹言」の使用数が、ほかの明治期往来物と比べてかなり多くなっている。したがって、『万体用文章』は、かなり近世的な性格の強い資料といえよう。あるいは、江戸時代に刊行されたものを、明治になって再板したものという可能性もあろう。この点については、さら

に詳細な調査が必要である。

B類のものは、明治二〇年代から刊行されている。明治二〇年代刊行のB類のものなかでは、『作文独稽古』が「拝啓」を多く用いており、新しい候文体書簡文をおさめたものと考えられる。また、積極的に参照すべきとはいいいくいが、『新撰注解用文』も「拝啓」「謹啓」の使用数から、今後とりあげるべきものとも思われる。三〇年代のものでは、「敬具」の使用数の多い『郵便用文』や「拝啓」「敬具」の使用数の多い『実益新用文』は、注目すべき資料といえよう。四〇年代のものでは、『尋常卒業後実用作文』が「拝啓」と「敬具」とが対応して用いられている例が八例あり、かなり斬新な往来物と考えられる。ただ、その一方で、この資料は、わずかではあるが古い面も持ちあわせている。というのは、表3に示したように、「頓首謹言」「叩頭謹言」など、近世の候文体書簡文に見られるような結語を用いているからである。明治後期は、明治維新後の急激な欧化の反動で、復古主義の風潮が広まった。そのような世相の影響により、「頓首謹言」などの近世的な感のある結語を用いているものと思われる。この点については、今後さらに詳しく見ていく必要がある。

C類のものは、「拝啓」などの使用数から新しい候文体書簡文をおさめていると思われる。とくに、『男子手紙講習録』は、「拝啓」「敬具」の使用数がかなり多く、斬新なものと思われる。しかし、その一方で、C類の往来物は「謹啓」を多用する点や、結語に「頓首謹言」「頓首再拜」「頓首頓首」を用いる点など、B類

の『尋常卒業後実用作文』と同様、古い面も持ちあわせている。¹⁷⁾ところで、右のように四〇年代刊行のB、C類のなかには、かなり斬新な面と復古的な面とをあわせもつ資料が見られる。これらについては、かならずしも当時一般の書簡文の様相を映していないのではないかという見方も出てくると思う。しかし、斬新な面についていえば、結果的には後の変化を先取りした形になっているわけであり、当時のひとつが指向していた書簡文の形式を示しているとも考えられよう。したがって、これらの資料は、同時期の資料とうまく対照させていけば、かなり有用な資料として使いうると思われる。

おわりに

以上、明治期往来物における頭語、結語の使用実態を明らかにするとともに、各往来物の性格についても考えてみた。これまでこのころをまとめておく。

明治一〇年代には、もっぱらA類の往来物が刊行されている。この類の往来物は板本仕立てで、書体が連綿の草書体となっているなど、近世の往来物の形をうけついだものとなっているが、用いられている頭語、結語を見ても近世の往来物をうけついだものということができる。しかし、明治二〇年代以降、A類のもので、頭語「拝啓」を多用するものが刊行されており、そのような資料は、近世とは異なる明治期の新しい意識のもとに編集されて

いると考えられる。

また、明治二〇年代には、洋装本、活字体のB類のものも刊行されるようになる。これらには、頭語「拝啓」のほか「謹啓」「拝復」を用いるものや、結語「敬具」を用いるものが多く見られ、明治期の新しい候文体書簡文を採録していると考えられる。

C類についても、B類と同様のことが指摘できる。「拝啓」「謹啓」「敬具」を多用しており、明治期往来物のなかでは、かなり斬新なものということができる。

なお、B、C類の往来物のうち、明治四〇年代刊行のものの中には、かなり斬新な面と復古的な面とを合わせもっているものがある。これらは、やや扱いにくい資料と考えられるかもしれないが、同時期のほかの資料と対照させていけば、有用なものとして使いうると考えられる。

以上のことから、明治期の候文体書簡文の特色を明らかにしていくにあたっては、B、C類のものを中心に見ていけばよいということになる。また、A類の資料についても、新しいスタイルが形成されていくまえの明治期の候文体書簡文の語い、文字表記などを知らするために参考として見ていくことが必要である。

なお、今後、さらに多くの往来物について今回と同様の調査をしていかなければならない。一方、本稿で注目すべきとした往来物については、頭語、結語以外にも語い、文体、文字表記などについて詳細な調査を行っていく必要がある。そうすることによって、明治期の候文体書簡文の特色が明らかになってこようし、ま

た、その調査の結果をフィードバックさせて、本稿で述べたことを確認、または補足、修正していけば、明治期往来物の資料的な性格がよりいっそう明らかになるであろう。

注

- (1) 飛田(一九九二)第三章などを参照。
 - (2) 木坂(一九七六)第六章などを参照。
 - (3) 橘(一九七七)で福沢論吉『文字之教』、樋口一葉『通俗書簡文』など五点がとりあげられているが、言語面についての具体的な考察はなされていない。
 - (4) 往来物には、男子用と女子用とがあるが、本稿では男子用の往来物を調査対象とした。また、わたしの研究のちがひから候文体書簡文の往来物について検討を加えることとしたが、明治期には言文一致体書簡文の往来物も刊行されている。女子用往来物、言文一致体書簡文の往来物については、別の機会に資料的性格などの検討をしたい。
 - (5) 橘(一九七七)第九章、第一〇章を参照。
- なお、橘(一九七七)は、「拝啓」の語誌を明らかにすることを目的としたものであり、資料として用いた往来物の資料的な性格についての言及は見られない。したがって、往来物の資料的な性格を見通すためには、あらためて本稿のような調査が必要となるのである。

- (6) 往来物の形態と使用語との関係のうち、往来物の書体と使用

語との関係については、小椋（一九九七）ですでに述べた。

(7) 明治二〇年代の資料では、『兩得用文證』『新撰用文章大全』に各一例見られる。

(8) 橋（一九七七）第二〇章を参照。

(9) 『日本教科書大系』往来編2く4・8、『往来物大系』消息科21く30所収の往来物を調査したが、「謹啓」は見いだすことができなかった。

(10) 「謹啓」のような古い語が再生された背景には、明治三〇年代、四〇年代に起こった復古主義の風潮が関係していると思われる。また、復活した「謹啓」が結果的に現代まで頭語として用いられ続けている要因としては、語構成が類似している「拝啓」の一般化と、「謹」が「拝」よりも丁寧な語基と意識されたことがあげられよう。

(11) 大正期の『ABCびき日本辞典』昭和期の『改修言泉』にも、次にあげるように、頭語、結語両用との記述がみられる。Ha-fuku [拝復] 返事することの敬語、返事の冒頭又は末尾に用ふ。『ABCびき日本辞典』(一九一七)

はいふべく 拜復・拜復【名】 書翰文の冒頭又は末尾に用ひて、恭しく返事する意を示す語。『改修言泉』(一九二九) これらの辞書の記述から、「拝復」が頭語専用となつたのは、「拝啓」にくらべ、かなり遅れるものと思われる。

(12) この頭語と結語との対応関係について、橋（一九七七）では、樋口一葉『通俗書簡文』、大町桂月『書翰文作法』の記述を引

用し、明治期には「拝啓」で書きたし「頓首」で結ぶのがもつとも一般的な形式と考えられていたとしている。

(13) 『尋常卒業後実用作文』では、本文にあげた例も含めて「九拝頓首」「頓首九拜」「頓首敬白」「頓首再拜」「頓首肅白」が各一例ずつ用いられている。

(14) 『書翰文作法』では「頓首再拜」が三例（本文の挙例を除く）、『男子手紙講習録』では「頓首頓首」が一例（本文の挙例を除く）、「頓首再拜」が二例用いられている。

(15) 大町桂月『書翰文作法』については、橋（一九七七）第九章を参照。

(16) 『実益新用文』は、一・二・二で述べたように和装本であるが、書体を重視してB類に分類した資料である。「拝啓」などの使用実態を見ても、B類の洋装本のものと同様似しており、本稿での分類が妥当なものであったといえる。

(17) 『書翰大成』『手紙講習録』が「謹啓」を多用する点については、復古主義が強く反映した結果とする見方のほかにも、明治四〇年頃には、「謹啓」が一般化していたとする見方もあろう。この点については、さらに多くの資料を調査していく必要がある。

【表2】

書名	拝啓		謹啓	拝復		敬具	謹言
	頭語	結語		頭語	結語		
万休用文章 (3)	0	0	0	0	0	0	24
新体書翰便蒙 (4)	0	0	0	0	0	0	0
普通用文章 (5)	0	0	0	0	1	0	1
文春自在 (5)	0	0	0	0	1	0	2
漢語文章大全 (5)	3	0	0	0	0	0	3
漢語用文 (5)	0	0	0	0	0	0	4
四季文章 (7)	1	0	0	0	0	0	1
日用文章 (8)	1	0	0	0	0	0	1
富貴用文章 (9)	0	0	0	0	0	0	2
作文白在 (9)	0	2	0	0	0	0	0
開化小学用文 (11)	0	0	0	0	1	0	1
往復日用文 (11)	0	0	0	0	2	0	0
小学開化用文 (11)	0	0	0	0	0	0	0
普通作文必携 (11)	0	0	0	0	0	0	2
作文須知 (12)	1	0	0	0	0	0	2
文章大全 (12)	0	0	0	0	0	0	0
農家作法用文 (13)	0	1	0	0	1	0	0
新撰公私用文 (14)	2	2	0	0	3	0	0
文語大全 (14)	2	2	0	0	3	0	1
開化普通用文章 (14)	0	0	0	0	0	0	4

開化用文 (15)	0	0	0	0	0	0	0	0	2
帝國用文章大成 (16)	0	2	1	0	0	0	0	0	1
中等作文大成 (18)	2	0	0	0	3	0	0	1	
大日本文章大成 (19)	1	2	1	0	0	0	0	7	
而得用文證 (23)	1	1	0	0	1	1	0	4	
帝國新用文大成 (23)	15	0	0	0	6	5	5		
明治作文三千題 (24)	19	0	1	0	1	3	0		
帝國公益用文 (27)	178	0	1	10	25	2	8		
作文早学 (27)	3	0	0	0	5	2	9		
作文独稿古 (28)	13	0	2	1	7	3	6		
新撰用文章大全 (28)	3	1	0	1	0	2	2		
新撰註釋用文 (29)	7	0	3	2	1	0	2		
明治用文 (29)	4	0	0	0	0	0	2		
帝國新体作文 (30)	11	0	0	1	0	1	4		
日本商業用文 (30)	36	0	12	1	3	3	3		
実益新用文 (32)	11	0	5	1	3	7	3		
郵便用文 (32)	5	0	4	0	4	12	7		
朝野普通用文 (35)	8	0	1	0	4	1	3		
普通書簡文 (35)	4	0	3	0	3	0	4		
高等作文雜習 (36)	11	0	2	1	3	0	7		
新撰手紙文例 (37)	1	0	0	0	0	1	2		
有益新用文 (39)	8	0	2	9	0	5	6		
青年書翰文 (39)	2	0	1	3	3	0	0		

書翰文習字用 (41)	21	0	1	6	0	5	3
日用文章 (41)	129	0	15	2	61	25	25
尋常卒業後実用作文 (42)	31	0	0	7	5	25	7
書翰文作法 (44)	25	0	5	11	2	18	10
書翰大成 (44)	4	0	13	7	0	1	0
手紙講習録 (45)	16	0	18	0	0	0	10
書翰文大全 (45)	33	0	7	18	7	11	6

【表3】

書名	恐惶啓書	恐々啓書	謝書	早々啓書	上様十啓書	贈書十様
万体用文章 (3)	16	0	8	0	0	0
新体書翰便蒙 (4)	0	0	0	0	0	0
普通用文章 (5)	0	0	1	0	0	0
文章自在 (5)	0	0	2	0	0	0
漢語文章大全 (5)	1	0	2	0	0	0
漢語用文 (5)	0	0	4	0	0	0
四季文章 (7)	0	1	0	0	0	0
日用文章 (8)	0	0	1	0	0	0
富貴用文章 (9)	0	0	2	0	0	0
作文自在 (9)	0	0	0	0	0	0
開化小学用文 (11)	1	0	0	0	0	0

往復日用文 (11)	0	0	0	0	0	0
小学開化用文 (11)	0	0	0	0	0	0
普通作文必携 (11)	1	0	1	0	0	0
作文須知 (12)	1	0	1	0	0	0
文章大全 (12)	0	0	0	0	0	0
農家作法用文 (13)	0	0	0	0	0	0
新選公私用文 (14)	0	0	0	0	0	0
文語大全 (14)	0	0	1	0	0	0
開化普通用文章 (14)	0	0	4	0	0	0
開化用文 (15)	1	0	0	1	0	0
帝國用文章大成 (16)	1	0	0	0	0	0
中等作文大成 (18)	0	1	0	0	0	0
大日本文章大成 (19)	1	0	6	0	0	0
兩得用文叢 (23)	1	0	3	0	0	0
帝國新用文大成 (23)	1	0	4	0	0	0
明治作文三千題 (24)	0	0	0	0	0	0
帝國広益用文 (27)	1	2	3	0	2①	0
作文早学 (27)	1	0	8	0	0	0
作文独稽占 (28)	1	0	5	0	0	0
新撰用文章大全 (28)	0	0	2	0	0	0
新撰注解用文 (29)	0	1	0	1	0	0
明治用文 (29)	0	0	1	1	0	0
帝國新体作文 (30)	1	1	2	0	0	0

日本商業用文 (30)	0	0	3	0	0	0	0
実益新用文 (32)	2	0	1	0	0	0	0
郵便用文 (32)	3	0	4	0	0	0	0
朝野普通用文 (35)	1	0	0	2	0	0	0
普通書簡文 (35)	0	0	4	0	0	0	0
高等作文独習 (36)	2	0	3	2	0	0	0
新撰手紙文例 (37)	0	0	2	0	0	0	0
有益新用文 (39)	1	0	3	0	2①	0	0
青年書翰文 (39)	0	0	0	0	0	0	0
書翰文習字用 (41)	0	0	1	1	1①	0	0
日本用文章 (41)	1	1	11	12	0	0	0
尋常卒業後実用作文 (42)	1	0	0	0	2②	4③	0
書翰文作法 (44)	1	1	7	1	0	0	0
書翰大成 (44)	0	0	0	0	0	0	0
手紙練習録 (45)	0	0	8	1	1①	0	0
書翰文大全 (45)	0	0	5	1	0	0	0

①：頓首謹言 ②：頓首謹言、叩頭謹言

③：謹言肅復、謹言頓首 (2例)、謹言再拜

【表 4】

書名	拜啓	謹啓	拜復	敬具	謹言	例文数
万体用文章 (3)	0	0	0	0	1.9	128
新体書翰便装 (4)	0	0	0	0	0	28

普通用文章 (5)	0	0	0	0	0.2	63
文章自在 (5)	0	0	0	0	0.4	50
漢語文章大全 (5)	0.4	0	0	0	0.4	78
漢語用文 (5)	0	0	0	0	0.9	46
四季文章 (7)	0.3	0	0	0	0.3	38
日用文章 (8)	0.2	0	0	0	0.2	66
富貴用文章 (9)	0	0	0	0	0.5	36
作文自在 (9)	0	0	0	0	0	60
開化小学用文 (11)	0	0	0	0	0.3	36
往復日用文 (11)	0	0	0	0	0	134
小学開化用文 (11)	0	0	0	0	0	51
普通作文必携 (11)	0	0	0	0	0.2	106
作文須知 (12)	0.6	0	0	0	1.3	16
文章大全 (12)	0	0	0	0	0	58
農家作法用文 (13)	0	0	0	0	0	127
新選公私用文 (14)	0.3	0	0	0	0	79
文證大全 (14)	0.2	0	0	0	0.1	115
開化普通用文章 (14)	0	0	0	0	0.4	96
開化用文 (15)	0	0	0	0	0.8	26
帝国用文章大成 (16)	0	0.1	0	0	0.1	79
中等作文大成 (18)	0.6	0	0	0	0.3	31
大日本文章大成 (19)	0.2	0.2	0	0	1.1	65
両得用文證 (23)	0.1	0	0	0	0.4	98

帝國新用文大成 (23)	1.5	0	0	0.5	0.5	100
明治作文三千題 (24)	1.2	0.1	0	0.2	0	157
帝國広益用文 (27)	2.8	0	0.2	0	0.1	633
作文早学 (27)	0.4	0	0	0.2	1.1	81
作文独習古 (28)	1.3	0.2	0.1	0.3	0.6	105
新撰用文書大全 (28)	0.3	0	0.1	0.2	0.2	95
新撰注解用文 (29)	0.9	0.3	0.2	0	0.2	81
明治用文 (29)	0.3	0	0	0	0.2	118
帝國新体作文 (30)	2.5	0	0.2	0.2	0.9	44
日本商業用文 (30)	2.9	1	0.1	0.2	0.2	122
実益新用文 (32)	1.7	0.8	0.2	1.1	0.5	63
郵便用文 (32)	0.5	0.4	0	1.3	0.7	94
朝野普通用文 (35)	0.8	0.1	0	0.1	0.3	98
普通書簡文 (35)	0.4	0.3	0	0	0.4	110
高等作文独習 (36)	1.4	0.3	0.1	0	0.9	77
新撰手紙文例 (37)	0.1	0	0	0.1	0.3	75
有益新用文 (39)	0.6	0.2	0.7	0.4	0.5	125
青年書翰文 (39)	0.2	0.1	0.3	0	0	102
書翰文習字用 (41)	4	0.2	1.2	1	0.6	52
日本用文章 (41)	1.5	0.2	0	0.3	0.3	877
尋常卒業後実用作文 (42)	2.9	0	0.7	2.3	0.7	107
書翰文作法 (44)	1.4	0.3	0.6	1	0.6	179
書翰大成 (44)	0.5	1.5	0.8	0.1	0	86

手紙講習録 (45)	5.3	6	0	0	3.3	30
書翰文大全 (45)	1.2	0.2	0.6	0.4	0.2	286

※各語の用例数を例文の数で割って得られた値に10をかけて算出した。

参考文献

- 木坂英 (一九七六) 『近代文章の成立に関する基礎的研究』
 風間書房
 橘豊 (一九七七) 『書簡作法の研究』風間書房
 飛田良文 (一九九二) 『東京語成立史の研究』東京堂出版
 小椋秀樹 (一九九七) 『明治期の女子書翰文における『参らせ候』
 の表現——明治期女子用往来物を資料として——』『語文』67

テキスト 『消息往来』『明衡往来』(以上『日本教科書大系』往来
 編)『書翰文作法』(『桂月全集』12博文館)

付記 本稿は、近代語研究会第一四八回発表会(一九九七年一〇月
 一七日、於：山形大学)における口頭発表に一部手を加えたものである。
 席上及びその後、多くの方々から、教示をたまわった。記して感謝申
 あげる。

(おぐら・ひびき 国立国語研究所研究員)